

石 巻 巡 検

荒 井 晶 子

上野発の東北新幹線で約2時間、列車はあっという間に仙台駅に到着した。そこで仙石線に乗り換え、さらに1時間ほど行った所に、私達3年生の最後の巡検地である石巻市があった。

7月11日、石巻駅に正午に集合した私達は、まず市役所を訪問し、石巻市の概況・都市計画・市の抱える課題等についてお話を伺った。石巻市は北上川河口に位置する港湾都市で、宮城県では仙台に次ぐ規模を有している。藩政時代は米の積出港として、明治以降は漁港として栄えた。仙台とともに仙台湾新産業都市に指定され、石巻工業港が開港してからは、工業都市としても発展を続けている。なお、石巻市の今後の課題としては、道路の整備を含めた市街地周辺の区画整理・再開発・潮見港の建設・石巻専修大学の開校問題等が挙げられた。

市役所をあとにして、私達は徒歩で日和山公園に行き市内を展望した後、海岸通りを歩き、市内商店街を通過して宿舎に戻った。

二日目はまず宮城県水産試験場を見学した。世界三大漁場の一つである金華山沖を有する宮城県は、全国第5位の生産量をあげており、養殖・沿岸沖合・遠洋漁業が行われている。とは言うものの、200カイリ問題以後遠洋漁業は衰退し、とる漁業から養殖・栽培というつくり育てる漁業へとその中心が移ってきている。水産試験場では、宮城県の沖合・沿岸海域の資源調査・漁業情報の提供・増養殖の技術開発・水質汚濁調査等が行われている。

蛇田公民館で昼食をとり、午後からはまず石巻農協で農業についての説明を受けた。次に蛇田浄水場で浄水施設を見学した。旧北上川で取水された水は浄水ポンプで浄水場に送られ、種々の過程を経てろ過される。同じろ過池の水がだんだん青く透明になっていくのには感心させられた。

最後に、農家訪問をする予定であったが、時間がなくなったので翌日に延期された。

三日目はまず、十条製紙石巻工場を見学した。ここでは約600種類もの紙が生産され、その量は

東洋一と言われている。工場は臨海立地の大型製紙工場で、敷地内には原料であるチップの山がいくつも見られた。

工場内の食堂で食事をとったあと、石巻魚市場を見学した。まず市場管理事務所で市場開設の経緯と市場での売買のしくみについての説明を受けた。ここも、北洋漁業の基地として建設された新漁港と同様、200カイリ問題以降、使用のされ方が変化してきている。魚が市場にずらりと並ぶのは年に2回あれば良い方で、普段は市場の1/3程度しか並ばないらしい。

次に、石巻市の工業部門において依然として重要な位置を占める水産加工業ということで、山徳水産の工場を見学した。ここでは練り製品のかまぼこ・ちくわが生産されていた。現在、練り製品の国内需要は年2～3%ずつダウンしてきており、若い人に受けるような商品の開発や、日本食ブームに乗って、アメリカ・ドイツなど外国への輸出等により需要の拡大に努めている。

最後に農家で聞き取り調査を行ったが、時間の都合で一軒しか訪問できなかった。

最終日はまず、1623年から4年を費やして、北上川改修工事を行った川村孫兵衛のお墓参りをしたあと、牡鹿半島の月ノ浦を訪れた。ここは、支倉常長が、1613年に伊達政宗の命を受けてイタリアに向けて出帆した地である。当時を偲んでしばし感慨にふけたあと、栽培漁業センターに向かった。ここでは、アワビ・なまこ・ガザミなどの種苗生産が行われていた。アワビは、宮城県の漁獲量650万tの40～80%がここで種苗生産され、放流されたものである。アワビの稚貝がとてもかわいらしかった。

最後の見学地である北上川下流工事事務所では北上川の改修工事等のお話を伺い、ビデオを見せていただいた。最後に職員の方々と一緒に記念撮影をしたのが印象に残っている。

以上、3泊4日の石巻巡検は、見学地が非常に多くて、じっくりと見学する暇がなかったのが多少残念であるが、様々な角度から石巻を捉えるこ

とはできたと思う。最後に、滞在中非常にお世話になった一方位さんには心から感謝の意を表した

い。

(7月11～14日 内藤教育指導)

菅平 巡 検

山 下 和 歌 子

前期の気候学の試験終了後に説明会、事前準備が始まった今回の巡検。予定表の「5日4時より8時まで」という早期観測の時間に驚き、秋休みの真ん中に行われることと相まって、出発前気が重かった者は少なくなかったはずである。目的地到着後は観測に明け暮れることになるので、皆の関心は専ら車中での駅弁に集中していた。

このようなスタートをきった菅平巡検の目的は微気候観測であった。4日の午後、現地集合した我々は、筑波大学菅平実験センターでの今後の観測の御指導、お世話をして下さる山下先生に荷物を預け、田宮教官と共に日本ダボスへ向かった。小高い丘といった日本ダボスの上から、宿泊地となる実験センターや、明日の観測地、周辺の地形を地図を片手に大まかに頭に入れた。山を下り、いよいよ明日の観測地の下見を行った。観測地は、南北を実験センター、日本ダボス、東西を菅平学園付近、唐沢、に囲まれた11ヶ所である。この時点ではまだ班分けがされておらず、各自この観測地の担当になるかわからないので、各地点の特徴をのみこもうと努力していた。実験所の内部、といった距離的に恵まれた地点から、菅平学園のグラウンドの端、実験所からかなり遠い足場の悪そうな地点、といったように観測地は広範囲の様々な条件に渡るものであった。

食後のミーティングで班分け、観測地の分担が行われ、各班毎に測器の準備にかかった。アスマン通風乾湿計、風向・風速計の使い方、設置方法測定上の諸注意を受けた。特に乾湿計は人の息のかからない所に固定される必要があるので、山下先生考案の二本の竿を立て、ぶら下げることになった。机上での事前学習後、戸外で実際器具を設置、検定し、全員明日の朝に備え早々と床についた。出発前に霜の降る可能性を知らされていたとはいえ、皆、早朝の寒さが気がかりであった。

予定の4時を4時半に変更したとはいえ、早起

きは慣れない者には辛かった。真暗闇を懐中電灯の明かりだけを頼りに、各班毎に観測地へ向かった。私達の班は、観測地点を間違えた上、4時30分の第一回観測時に間に合わず、5分遅れのスタートになるという、ハプニングを一手に引き受けてしまった。4時30分から8時までの5分毎の、長い観測が始まった。前日、全員時計合わせをしたとはいえ、人の手による観測には測定時間に数秒の違いはでてくるものである。この観測の前提として、夜間冷やされた空気が山を下り、冷気湖を作る、ということがあった。このようなことを観測結果から証明するためには、いったいどれ程までの誤差が許されるのだろうか。しかし、正直なところ観測地を間違えたことすら、先生が見回りで来て下さらなければ気づかなかったであろう我々である。観測中は数秒の誤差どころではなく、ただ寒さに耐えるのに必死であった。7時25分時点でやっと太陽が現れ、他の班の人を確認することができた。それまでは、天気の設定も暗がり故、月の出方を頼るしかなかった。8時の最終測定終了時は、暖かい実験センターに帰れる喜び以外何も感じられなかった。

午後の観測12時から16時に出かける前に、器具の誤差検定がセンターの庭で行われた。午前とはちがいに太陽が姿を見せているとはいえ、長い観測を思い、足取り軽くとはいかなかった。各自弁当を持ち、器具を手に、今回は場所を間違え班も、器具設置に手間取る班もなく順調なスタートをきった。しかし、当初の太陽はほどなく姿を消し、強風の吹きさらす観測地では午前以上に寒さとの闘いが強いられた。通りがかりの人に「何ができるんですか」と勘違いされたことにもめげず、黙々と観測を続けたが、予定の16時を待たずして3時10分に雨に見舞われた。観測を諦めた我々は器具を手に、指定の避難所に駆け込んだ。

夜の結果報告を中止し明日に延期となり、先生